



## ブリュージュルの「子供の遊戯」 6

——ナイフ投げから足蹴りごっこまで——

森 洋子

### 30、ナイフ投げ Meekken-steek (図1)

前景右端で、二人の男の子が地面に膝をつき、ナイフ投げに夢中になっている。ベージュの上衣と同色のズボンを身につけた男の子が、ナイフの柄を右手の掌に、その刃先を口にくわえ、左手で地面の一点を指している。

彼は次の瞬間、ナイフの柄を右手の掌でたたき、できるだけ目的の個所に近づけて刃を突き立てなければならぬ。もしそれに失敗すれば負けて相手の番となる。他

方、ブルーの上衣を着た男の子の方は、掛け声をかけているのか、あるいは相手のやり方に抗議しているのか、右手をあげて激しく話しかけている様子。

W・W・ニューウェルの研究<sup>註1</sup>によると、二十世紀初期のアメリカでも、このナイフ投げが盛んに行なわれたという。ニューウェルはかなり詳しくナイフの投げ方の種類を伝えている。

(1) ナイフをまず右手の掌に、つぎに刃を外側にむけて左手で持ちかえる。それから刃先が手前に来るように投

げる。

(2) ナイフを立てて右手の掌、それから左手にもち、つぎに脇の方に投げる。

(3) ナイフの刃先きを片方の手の親指と他の手の指（どの指でもよい）ではさみ、それから、外にむかって投げ



図1 ブリュエゲル「ナイフ投げ」・「煉瓦積みごっこ」（「子供の遊戯」の部分 ㊸・㊹）

る。

(4) 刃先きをしっかりと保ち、胸、鼻、目の高さの順で、外にむかって投げる。

(5) 両腕を交叉させ、どちらかの耳の上のせ、手でつかんで投げる。

(6) 頭の上にナイフをのせ、後方へ投げる。

このナイフ投げはこうしてフランドルだけでなく、世界の各地で男の子たちによって興じられたであろうが、その投げ方にも色々なヴァリエティがあることが、このニューウエルの研究から知られ、興味深い。

なおラブレリーの『ガルガンチュア物語』第二十二章にも「短刀当て」として列挙されている。

### 31、煉瓦積みごっこ *Metselen* (図1)

ナイフ投げの少年たちの背後に十七、八個の煉瓦が散在している。といってもよくみると、全体が円形をなしているのが、井戸の囲壁づくりの途中のようだ。すでに一部は煉瓦が積み重ねられ、また、一部は悪戯っ子に壊

されたようでもある。だが不思議なことに、子供の姿はみかけない。おそらく煉瓦が足りず他所へ探しに行ったのか、側で「髪の毛むしり」が始まり、恐ろしくて逃げたいたのであろうか。

この遊戯名は一応、ド・マイヤー<sup>註2</sup>に従い「煉瓦積みごっこ」としたが、確かにフランドルの子供の遊びに「井戸づくり」Waterputten maken という表現がある。<sup>註3</sup>

このほか、「お家づくり」と解している研究者もいる。コックとテリリンク<sup>註4</sup>によると、今日でもブリュッセルで、道路の舗装工事のとき、子供たちが舗石や砂利をかき集め、家を作って遊んでいるという。この場合の家は „huis” (家) ではなく、 „ketjes” (小屋) とよばれる。既述した棒馬ごっこ (本誌一月号、十一頁) の中で、十四世紀のヒューゴー・トリムベルクの詩を紹介したが、そこで老人が子供と棒馬遊びをし、水浴に出かけ、「お家作りをするのを手伝った」<sup>註5</sup>と謳われている一節も、情景としてはこうした煉瓦遊びを思わせるのである。

### 32、髪の毛むしり Haarkeupluk (図2)

ひとりの男の子を囲んで、五人の子供たちが、彼の頭髪を無理やり引き抜こうとしている。いじめられる子供は左手でしっかり帽子を守りながら、右手で必死に抵抗する。その表情から、痛みのため叫び声をあげているようである。これはおそらくある特定の遊びで負けた子供への罰則ごっこなのであろう。Van Dale の現代オラン



図2 ブリュッゲル「髪の毛むしり」  
 (「子供の遊戯」の部分 ㊸)

ダ語辞典にも、この遊びを思わせる pandverpeuten と  
いう語があり、そこには「遊び仲間の誰かが負けて、担  
保を要求され、後に償わなければならないグループ遊  
び」と記されている。その遊びとして、ハイディングは<sup>註6</sup>  
35の「帽子、帽子を脚の間から」と関連づけている。つ  
まり帽子投げ遊びで負けた子は、通常、仲間から頭をな  
ぐられるのだが、時にはその代わりに、「頭髪をむしら  
れる」こともあり、その行為がこの情景という。すでに  
十六世紀のドイツの詩人ガイラー・フォン・カイザーベ  
ルクがその著『福音書』の中で、こう述べている。<sup>註7</sup>

「君はこれまで見たことがないかい、

少年たちが学校で互いに競争し、

三、四本の髪の毛を引き抜いているのを。

だがそれ位ならまだ気がつかないにちがいない、

もしそうだとすると、

子供たちは髪の毛をまとめて引っぱる、

そしてそれをしようとするとき、

相手のほほを強くなぐる、



図3 ヘラルト・ホーレンベルフ「ゴルフ遊  
びと髪の毛むしり」（『時禱書』11月の部  
分）1510年頃、アントウェルペン、マイ  
ヤー・ヴァン・デン・ベルフ美術館  
HSS 946

それがとても痛く感じると、

髪を抜かれても何も感じないからだ。」

一五四〇年前後に、ブリュッヘ（ブリュージュ）の細

密写本工房で彩飾された時禱書にこの遊びが見出される

ことは、きわめて興味深い。この時禱書はヘラルト・ホ

ーレンベルフの工房で制作されたと推定されるが、十一

月のフォリオの上部の飾縁をみると、中央に「射手座」

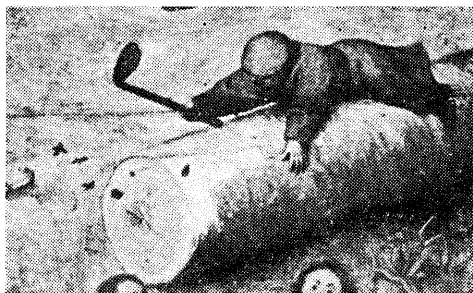


図4 ブリューゲル「昆虫を捕える」(「子供の遊戯」の部分③)

の記号、そして左側に「髪の毛むしりとゴルフ遊び」(図3)、右側に「ゴルフ遊び」が画かれている。こうしてみると、この髪の毛むしりはゴルフ遊びと何か関連があり、何回か反則を犯した場合、約束にしたがい、髪の毛をむしられるのかもしれない。

### 33、昆虫を捕える Torren vangen (図4)

「髪の毛むしり」のすぐ背後で、地面に置かれた大きな木に這い上っている子供がいる。彼はハンマーかゴルフのクラブのようなもので、木の皮をはぎ、中に隠れているハサミ虫などの昆虫を捕えようとしている。こうして得た昆虫はボール紙や板の上に虫ピンで留めら

れた。板の上でピクピクと虫のあがく回数で、子供たちは将来、いつ結婚するのか、子供は何人生まれるのか、お金持になれるのか、何歳まで生きられるかを占って、楽しんだのである。<sup>注8)</sup>

しかしまた子供たちは虫ピンで留めたりせず、長い糸にしばって飛ばせたりもしたらしい(本誌十一月、三十三〜四頁の「小鳥遊び」を参照)。

### 34、ヴォラールト運び Spel met den Vollaard

(図5)

「昆虫を捕える」少年のすぐ前で、三歳位の女の子が背丈ほどの大きな長いパンを大事そうにかかえている。この特別の形のパンについて、研究者は色々な名称で呼んでいる。ド・マイヤー<sup>注9)</sup>は「ヴォラールト」と名づけているが、これは古の祖先たちが古代ローマの異教徒から習ったパンで、新年に供物として神に捧げられたのである。それがキリスト教時代には「天使のケーキ」とよばれ、彩色された丸い陶板の飾りがパンにつけられた。さらに

十六、七世紀のフランドルでは、キリスト教の御絵（版画）に、このヴォラールトが描かれ、こう記されていた。

「おお、可愛いイエス様よ、

あなたはまことわれらのための、

聖なる新年であられます。」

<sup>注10</sup>

また民俗学者のJ・ウエンスはこのヴォラールトは十二月六日の聖ニコラウスとか新年の祝祭日に焼かれる飾りのある大きな長パンで、子供たちへの贈物となると述べている。さらに彼は今日でも、ベルギーのブランケンヘルフの「パン屋通り」Bakkersstraat ではこの種の



図5 ブルーゲル「ヴォラールト運び」（「子供の遊戯」の部分③）

パンが焼かれていることを指摘している。

ほかにハルトマンとレンスは、この長パンをコリント

・パン（干しぶどう入りパン）と呼称し、夏の終りを祝

う九月二十九日の聖ミカエルの日に焼かれると述べてい

る。その夜半過ぎ、両親は子供たちの枕の下にこっそり

とこのコリント・パンをプレゼントするが、その翌朝、

子供たちはパンを発見し、それをかかえて町中を歩くの

であった。このほかヘフラーは、「約四十八センチの長

く太いお菓子パンで、上と下に頭部が形づくられ、中間

部が幅が広い」と記している。

この「ヴォラールト運び」の子供はブルーゲルの画

面で木靴をはいている唯一の子供で、さらに注目すべき

は頭に紙の冠をつけている。この冠は既述の17の「いく

つもっている」や26の「風船遊び」にも画かれていた。

これまでこのパンと関連する祝祭日は新年、九月二十九

日、十二月六日と様々であったが、この少女の紙の冠そ

のものは一月六日の東方三賢王礼拝の祝日か、二月の謝

肉祭のいずれかを表わすのであろう。しかしブルーゲ



図6 ブリュエール「帽子、帽子を脚の間から」（子供の遊戯」の部分⑤）

ルの「謝肉祭と四旬節の喧嘩」には、紙冠はあっても、ヴォラールトは画かれてないので、この女の子は季節的には一月六日の東方三賢王のひとりに扮しているのだろうか。

### 35、帽子、帽子を脚の間から

Hoedje, hoedje door het been (図9)

すでに32の「髪の毛むしり」で述べたように、この遊びは一種の帽子投げである。まずひとりの子供が帽子を目深に被り、盲ら鬼にされる。彼は大きく脚を開くと、仲間がその間から自分の帽子をできるだけ遠くへと投げる。ハルトマンとレンス注12によると、子供たちはこの時「走れ、口、走れよ」と呼ぶという。この場合の「口」は奴という意味であろう。盲ら鬼はそれから地面に投げ出された帽子にむかって走り出す。最初に踏んだ帽子の持主は、即座に逃げ出さねばならない。他の男の子たちが自分の帽子を拾い、この新しい鬼を追いかけ、帽子で殴るからである。

これに対して、ド・マイヤー注13は全く異なった遊戯を説明している。彼はこれを「暖かい手」のヴァリエーションのひとつと考えた。つまり帽子で目隠しされた男の子は二人の男の子の肩にかつがれる。彼は両手をびったりと両ももにつける。それから仲間がその手の上に触るのだが、盲ら鬼は誰の手かを当てねばならない。当たったならば、盲ら鬼は交代。ゆえにド・マイヤーは「盲らかつ

多) 7 Blindemannetje rondragen と呼称した。だが、盲ら鬼の足は実際には地面についていて、仲間の肩にかつがれているわけではなく、また帽子の説明も不十分なため、ド・マイヤーの記述は正しくないように思われる。

### 36. 兔跳び Haasje over (図7)



図7 ブリュエゲル「兔跳び」(「子供の遊戯」の部分⑩)



図8 ビーテル・ヴァン・デル・ボルフト「兔跳び」(「猿の遊戯」の部分) 銅版画, 1580年頃

この遊びはブリュエゲルの画面では六人で行なわれる。兔役になった子供は背の高さによって膝頭か足首を両手でしっかり押え、体を曲げる。もし跳び手の邪魔をしたい時は、垂直に立つようにする。

わが国では一般に「馬跳び」とよばれるが、ヨーロッパでは種々の名がつけられている。フランドルでは他に

over 't Ijken 「小さな身体を越えて」と

い、英語で Leap frog 「蛙跳び」、仏語

で saute-mouton 「羊跳び」、独語で Bolk-

springen 「牡山羊跳び」とよぶ。とくに興

味深いのは、ドイツでは子供の体の曲げ方

によって、跳び名が変わり、頭を進行方向

にむければ、「山羊跳び」、横に出せば「ハ

ンマー跳び」などとよばれる。

ブリュエゲルの絵からヒントを得たビー

テル・ヴァン・デル・ボルフトの「猿の遊

戯」(図8、一五八〇年頃)にこの遊びが

画かれていることから、当時すでにポピュ



ラーな遊びだったと思われる。

この遊びを謳った十七世紀のオランダやフランドルの詩をいくつか紹介しよう。まず十七世紀の無名詩人の『児童の書、または子供の遊戯の寓意』にこう謳われている。

「背中の上を跳んでいる、

みてごらん、どんなにか速い脚で

他のひとつの上を跳んでいるか、

他のひとつが跳び越すまで、

体をずっと低く曲げている、

前のひとつがやったことを、

後のひとつもやり、

そして前のひとつに続くのだ。<sup>15</sup>」

ジャック・ステラはフランドル生まれの詩人だが、そのフランス語の詩集『子供の遊戯と楽しみ』（一六五七年）では、動物の名前ではなく、「ポスト」（図9）と題している。

「一列に並び、軽やかに、

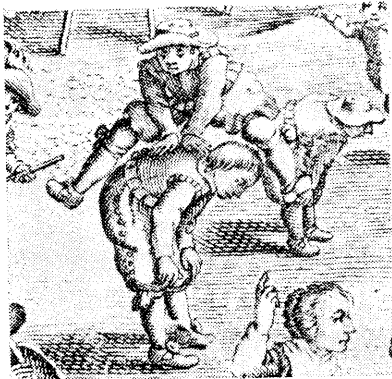


図10 E. シリマン「兎跳び」（カッツ『結婚について』1642年より）銅版画



図9 クローディン・ブゾネ・ステラ「ポスト」（ジャック・ステラ『子供の遊戯と楽しみ』1657年より）銅版画



図12 「兎跳び」オランダのタイル画  
17世紀中期



図11 「兎跳び」オランダのタイル画  
17世紀後期

ひらりと跳び越す練習をする、  
跳んだり、体を曲げたり。

もし誰かが好奇心をもって、

誰が一番上手に跳ぶか、

審判するなら、

眼鏡などはいらないさ。<sup>注16</sup>

この二つの詩は、子供が元気に跳躍する様を謳っているだけだが、十七世紀のヤコブ・カッツは人生への警鐘として、こう寓意的に謳い上げている(図10)。

「みてごらん、どんな風に子供は、

仲間を下に押し、跳んでいるかを。

みてごらん、どんな風に傲慢な者が、

すべての子供の上を越えて行くか。

しかし、どんな風に遊びが終り、

その運命が逆転するかを、

みていてごらん。

しばらくの間、体を低くしていたひとは、

ふたたび、生々していることを示す、

かつて高く跳んだものは、

すべて小さな仲間を押ししたが、

今はふたたび自分の頭を低くする、

彼の当初の権力が奪われたかのよう<sup>注17</sup>に。

なお同時代のタイル画でも、この「兎跳び」が好んで描かれたようだった(図11、12)。図11のタイル画の直接の範例は、図10の版より早い一六二五年版のカッツの『結婚について』の挿図版画(ヤン・ヴェルストラールン刻)と思われる。

### 37、線の上で引張る Trekken over de lijn

(図13)

この遊びは二つのグループによって行なわれ、各々三人ずつから構成されている。つまり、リーダー、馬、騎士役の子供が互いに仲間<sup>注18</sup>に助けられながら紐を引張り合い、相手を線の内側に踏み入れさせたら、勝負がつく。ちょうどわが国の「綱引き」に似ているが、フランスの遊びは、もっと複雑で、途中で騎士が落馬すれば

負けである。プリュ

ーゲルは左側のグル

ープをほぼ背後から

描き、各々が力を入

れてふんばっている

様子を強調。それに

対し、右側のグルー

プでは騎士とリーダ

ーの赤潮した頬や、

馬役の男の子がリー

ダーの腰紐にしっかりと

り掴まって頭をうず

めている様子を見事

に表現している。

ドローストはこの遊びを「綱を引張る」<sup>注18</sup>、ハイディン

グは「騎馬合戦」<sup>注19</sup>、ハルトマンとレンスは「石の上で引

張る」<sup>注20</sup>などと呼称しているが、すでに古代ギリシャ時代

では *Dielkysinda* として知られていた体育のひとつだ



図13 「線の上で引張る」(プリュージェル「子供  
の遊戯」の部分⑩)

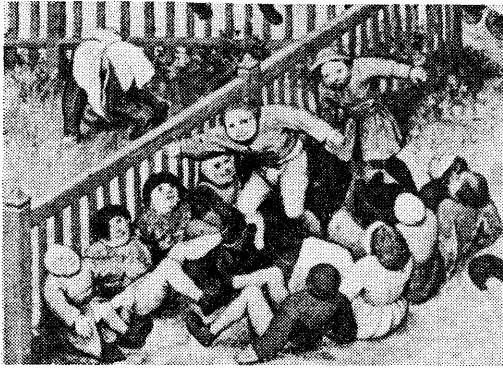


図 14 「足蹴りごっこ」(ブリューゲル「子供の遊戯」の部分⊗)

反則を犯した仲間への罰則ごっことも考えられる。子供たちは五人ずつ二列になって地面に坐り、両足を前に出す。そこを二人の男の子が通過しなければならぬのだが、

った。つまり二人の少年が互に向い合い、どちらかの側へ引張るといふ運動として行なわれたのである。<sup>注21</sup>

### 38、足蹴りごっこ De Spitskar (図 14)

ブリューゲルの画面全体でもっとも多い人物のグループ遊びである。いや遊びというよりは、32の「髪の毛むしり」と同様、

仲間たちはかなり乱暴に足蹴をし、二人を前進させないように妨害する。そのため、二人はかなり高く、巧妙に跳ばねばならない。しかし子供たちの表情からこの罰則ごっこは「髪の毛むしり」ほど残酷でないことがうかがわれる。ド・マイヤー<sup>注22</sup>はもとの遊びが「ハンカチ落とし」であるといい、コックとテーリンク<sup>注23</sup>は「橋ごっこ」と述べている。後者は37の「線の上で引張る」に関連した一種の「綱引き」で、それぞれのリーダーのもとに子供たちが二列に相対し、綱を引張り合うのである。そして敗けたグループがこの足蹴の刑罰をうけるのである。

ところでこの罰則ごっこは軍隊での排列撻刑を模倣しているようだ。オランダ語では *door de spitsroeden loopen* といわれ、Van Dale の現代オランダ語辞典によると、規則に違反した兵隊が上半身裸になって、苔をもつて二列に並んだ兵隊たちの間を通過しなければならぬ刑罰がある。罰は仏語で「カウディネ隘路を通る」*passer sous les fourches caudines* ともいわれるが、これは古代ローマ時代の故事に溯ることができる。カウデ

イネはカブブとハネヴェントゥムの間の隘路で、紀元前三二一年、ローマの四軍隊(約数万人)がサムニウム軍に包囲され、惨敗したのである。それ以来、排列擡刑とか、みんなにじろじろ見られる中を通る、屈辱を忍ぶ、などという表現が生まれたのである。(東京工芸大学)

- 注1 William Wells Newell, *Games and Songs of American Children*, New York, 1911, p. 189.
- 注2 Victor de Meyere, *De Kinderspeelen van Pieter Bruegel den Oude verklaard*, Antwerpen 1941, p. 5.
- 注3 W. P. Drost, *Het Nederlandsch Kinderspel voor de Zeventiende Eeuw* (Dissertation), Leiden, p. 131.
- 注4 A. De Cock en Is Teirlinck の語訳は Jeanette Hills, *Pieter Bruegel Kinderspele 1560*, p. 31. 参考
- 注5 Higo von Trimberg, *Der Renner*, 1347, G. Ehrismann 譯 Bd. I, p. 111, 2697 頁。
- 注6 Karl Haiding, "Das Spielbild Pieter Bruegels", *Bauweise*, 6. Jahrgang 1937/1938, p. 66.
- 注7 Geiler von Kaiserberg, *Evnggibuch*, 1522 (Zinglerle, *Das Deutsche Kinderspiel im Mittelalter*, Innsbruck, 1873, p. 47ff. 参考)。
- 注8 De Meyere, *op. cit.*, pp. 5-6; G. Hartmann en E. Lens, *Héte Jôhi* Amsterdam 1976, p. 62.
- 注9 De Meyere, *op. cit.*, p. 6.
- 注10 J. Weyns, "Uit Bruegel in de leer voor honderd en een dagelijkse dingen", *Ons Heem*, Jg. XXXIII, 1969, Nr. 3, p. 29.
- 注11 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 63.

- 注12 *Ibid.*, p. 64.
- 注13 De Meyere, *op. cit.*, p. 6.
- 注14 Hills, *op. cit.*, pp. 26-27.
- 注15 無名詩人 *Kinderverck ofte Sime-Beelden van de spelen der kinderen*, Amsterdam 1626 (Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 67 参考)。
- 注16 Jaques Stella, *Les jeux et plaisirs de l'enfance*, Paris 1657 (reprint: *Games and Pastimes of Childhood*, New York 1969), No. 36.
- 注17 Jacob Cats, "Kinder-spel", *Huwelyck*, Amsterdam 1625 参考 Jan Pluis, *Kinderspeelen op tegels*, Assen 1979, p. 128 参考。
- 注18 Drost, *op. cit.*, p. 146.
- 注19 Haiding, *op. cit.*, p. 64.
- 注20 Hartmann en Lens, *op. cit.*, p. 65.
- 注21 Hills, *op. cit.*, p. 26.
- 注22 De Meyer, *op. cit.*, p. 6.
- 注23 A. De Cock en Is Teirlinck, *Kinderspel en Kinderlust in Zuid-Nederland*, Ghent 1902-1908, Bd. I, p. 236, p. 243. (1873-1938)
- 注24 ☆本連載第二回から解説してゐる個々の子供の遊戯のオランダ語表記は、主としてマントナー・レ・トインヤー博士(1873-1938)【本注の参照】による。同博士は、アントウワマンの民族博物館長を歴任したベルギー最高の民族学者の一人である。